

『贋金つかい』（ロンドン草稿）校訂版の批判的検討：作品冒頭部の執筆時期と方法

吉井，亮雄
九州大学文学部

<https://doi.org/10.15017/9928>

出版情報：Stella. 9, pp.148-167, 1991-03-15. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：



『贖金つかい』(ロンドン草稿)校訂版の批判的検討

——作品冒頭部の執筆時期と方法——

吉 井 亮 雄

リヨン第2大学に設置されて以来、今日までおよそ20年間、旺盛な出版活動によって斯界の発展に多大な貢献をしてきたジッド研究センターから、このたび『贖金つかい』断片稿の批評校訂版が公刊された¹⁾。当該稿についてはすでにシルヴィアーノ・サンチャゴによる版が存在していたが²⁾、序文や注がポルトガル語のため参照が必ずしも容易ではなかったばかりか、テキスト本文に誤植や誤読・脱落などの不注意なミスが多いという、校訂版としては致命的な欠陥をもつものであった。こういった不備の是正を使命とする新版の作成作業には、とりわけその「秀逸にして、参照が不可欠」³⁾と評される著書、『「贖金つかい」におけるエクリチュールと可逆性」⁴⁾で知られたヒューロン大学教授デーヴィッド・キポールがあたっている(筆者の承知するところでは、彼は目下『背徳者』についても校訂版を準備中)。『贖金つかい』はジッドの数多い著作のなかでもとくに論議の対象となってきた作品だけに、またこの作家のばあい、同時代のプルーストなどに比べると草稿研究を基本とする生成学が依然おおきく立ち遅れているだけに⁵⁾、先行版よりもはるかに信頼しうる原文筆写を提示した今回の出版はまことによろこばしく、意義ぶかいことといわねばなるまい。また、作品を総合的にあつかった経験のある研究者によるものだけに、草稿のなかにもられたジッド特有のテーマの分析にもさすがに興味ぶかい指摘が少なくない。しかしながら、生成学上なによりも優先されるべき課題、すなわち草稿執筆の時期や方法という点にかんしては、キポールの分析・推測は総じて実証的な慎重さに欠け、とうてい説得的なものとは認められないのである。したがって本稿では、要約や抄訳によって彼の主張をできるかぎり忠実に紹介したうえで、その検討・批判をつうじて、今後定説として承認されうる代替的仮説の提出をこころみる。

さて、問題の断片稿はブリティッシュ・ライブラリー手稿部に現蔵されているが（「ロンドン草稿」という呼称はこのため）、もともとは1949年4月初旬にジッドが、ヌーシャテルでイド・エ・カランド出版社を営む友人リシャル・エイ（リハルト・ハイト）に、かつて当地滞在中にうけた厚誼を謝して贈ったもので、このスイス人の死後はブラジルの蒐集家がしばらく所有していたこともある⁶⁾。記載テキストは決定稿の第1部第2章および第3章冒頭部に対応するものだが、物理的には用紙や頁付方法の異なる2つの紙片群から構成されている。つまり、7A, 8A, 22Aと番号を打たれた「定形便箋」3葉と、2から6, ついで9から21, そして23から26と、規則的に頁付された透かし入り大型紙（縦30×横20センチ）22葉である。第2章は7A・8A（自分の出生の秘密を知った主人公ベルナールが父に宛てて書く手紙）を含んで2から21までを占め、内容的には完全に独立した草案「兄と妹の対話」を記載する22Aがこれにつづき、23から26が第3章の冒頭部をなす（最終紙片は唐突に中断）。6の後半が白紙状態であるほかは、いずれの紙片も全面をテキストが覆い、しばしば裏面も使用されている（紙片1にはジッドがエイ夫妻に宛てた献辞が記されるが、その紙質・判形についてキイポールはいっさい触れていない）。

このように量的にはささやかなものだが、のちに多様な展開を見せる物語の主題論的な発端をなす部分であることや、自筆完全稿の閲覧がきわめて困難な現状を思えば⁷⁾、作品の生成研究において当該断片稿が占めるべき位置はけっして小さくはないのである。とりわけ注目すべきは、他とは紙質・判形を異にする紙片が3葉のみ存在し、しかもそこにはいずれも使われずに終わった草案が含まれている点であろう。なかでも紙片7A・8Aの2つの草案はキイポールが自説形成のさいに主要なよりどころとするものだから、あらかじめこれを原文で提示しておきたい。まず、手紙に接続するかたちで紙片7Aの冒頭に記された草案は、帰宅し、家人の不在を告げられた主人公が手紙を書き始める場景を以下のように素描している（[] は削除, < > は加筆, < [] > は削除後ふたたび採られた語句）。

[Bernard est rentré. Il demande à Ferdinand, le larbin : Mon père est
<[de retour]>

- [Non] Monsieur! <ne doit rentrer que pour dîner.> Il n'y a personne. -
Il ouvre la porte du bureau de son père (description) il soulève la tenture -
Il écrit:] / [71] *suit, à la ligne suivante, la lettre de Bernard /*

これに対して、手紙のテキストにつづく紙片 8 A の末尾には、ベルナールの家出を知った父母や長兄の反応がそれぞれ各人が心中で発する一言によって特徴的に示されているが、結果的にはこの草案の部分が抹消され、決定稿にはほぼそのままのかたちで採録される追伸が手紙を補完するために書き足されているのである（決定稿では、破線の箇所に末弟の名前カループが入る）。

[Le père pense : Quel ingrat.

La mère : [J'ai] Je n'aurais pas dû revenir

Le grand frère : Le misérable !]

P.Sc. Je laisse chez vous toutes mes affaires qui pourront servir à --- plus légitimement je l'espère pour vous. / [75] *fin du Feuille 8A* /

以上の前提的な了解にもとづき、キイポールの問題提起・議論を追ってみよう。草稿の執筆時期を確定しようとする試みは作品生成にかんする網羅的な研究をぬきにしては危険がともなうだろうし、その研究も小説のさまざまな段階を形成する各草稿を参照しないならば年代的な空白を残すことになるだろう。そう断ったうえで、彼はひとつの確かな事実を指摘することからはじめる。つまり、本断片稿はジッドが主人公をラフカディオと呼ばなくなった時期に属する、なぜならば、この名前は当該稿にはまったくあらわれず、ベルナールの名前がためらいなく使用されているから、という事実である。この点にかんしてはいくつか証言が残っており、たとえば『贖金つかいの日記』にラフカディオの名前が認められるのは 1921 年 8 月が最後で、他方ベルナールへの最初の言及は翌年 8 月 20 日のことである⁸⁾。さらにマルタン・デュ・ガールがジッドに宛てた書簡によって、その間の 1921 年 12 月 16 日時点ではジャックという名前が過渡的に使われていたことがわかっている⁹⁾。そして、ジッドの 1922 年 10 月 7 日付同人宛書簡になってはじめてつぎのような記述が見られるのである。

ご存じのように、私のばあい、仕事は突然のひらめきによって進みます。先夜、物語の大きな部分が突然明るみに浮かびました。私はベルナールが不義の子であることをさとしたのです。彼自身がこのことを発見する。そしてこの発見の結果が彼の家出となる、等々。¹⁰⁾

ベルナールがラフカディオの新たな化身であることを思えばひどく遅ればせのひらめきだが、いずれにせよこの記述が第 1 部の冒頭部やベルナールの手紙に

照応するものであることは疑えない。すると、草稿全体が1922年10月7日以後に執筆されたと結論すべきなのか。サンチャゴはジッドの記述にはまったく言及していないが、7A・8Aが最初に書かれ、作家はこれを核にして残りの部分を書いたのだと主張していた。それに対してキイポールは、サンチャゴ説は用紙の相違と、2紙片の草案がのちに削除されるという点だけから導き出されたもので、たとえそこに、草稿の他の箇所や決定稿では兄の名前はシャルルなのに22Aではギイとなっていること、7A記載の草案では執事アントワヌがフェルディナンという名前であることを補足したとしても、やはり根拠は薄弱であると批判する。なぜならば、ジッドの上記書簡は動機の発見のみを問題にしており、ベルナールの家出そのものについては既定の事実として語っているからである。たしかに、当時はこれらのすべてがまだ単なる着想の段階にとどまっていたということもありえよう。だが、私生児の主題によって家出を動機づけることをせずにジッドが最初の数章を実際に書いていた、そして「突然のひらめき」に応じて事後の修正を加えたという可能性を否定しうる要素はなにひとつないのである。つまり、7A・8Aは非常に長い「加筆」として残りの紙片群に組み込まれたこともありうるのだ。そしてそのばあい、2つの草案については、すでに書かれていたテキストに施すべき修正のメモと考えざるをえない。これはけっして論理一辺倒の仮説などではなく、詳細な草稿分析によって、先行テキストの存在、つまり小規模な推敲をされた「初稿」の存在を確認することができるのだ。そうキイポールは断言するのである¹¹⁾。

では詳細な草稿分析とはどのようなものなのか。キイポールの主張がひとえにその正否にかかっているだけに、煩瑣であるをいとわず、まず彼の作成した草稿／決定稿の対照リストを掲げ、ついで論証の主要な部分を訳出・提示しよう。なお、リストにおいてFは草稿の紙片番号を、Sは草稿および決定稿の内容や場面によって便宜的に分割されたセカンスを示す¹²⁾。

Version définitive	Texte du manuscrit	
S		F
<i>Chap. I</i>	<i>Chap. I</i>	
1 Bernard découvre sa bâtardise.		
2 Au jardin du Luxembourg.		
<i>Chap. II</i>	<i>Chap. II</i>	
3 Sur le bd St-Germain.	Sur le bd St-Germain.	2-4
4 Départ de Bernard.	Départ de Bernard.	4-5

5	Interruption d'Antoine.	Interruption d'Antoine.	5-6
6	Lettre de Bernard.	Lettre de Bernard.	7 A-8 A
7	Profitendieu médite.	Profitendieu médite.	9
8	Interruption de Blanche.	Interruption de Blanche.	9-10
9	Interruption de Caloub.	Interruption de Caloub.	10
10	Entrée de Marguerite.	Entrée d'un viel ami.	10-11
11		Entrée de Charles.	11-12
12		Entrée de Marguerite avec Bronia.	12-13
13		Conversation générale.	13-18
14		Profitendieu se retire.	18
15		Départ des «deux fâcheux».	18-19
16	La famille autour du père.	La famille autour du père.	19
17	Dialogue entre époux.	Dialogue entre époux.	19-21
18		Profitendieu médite.	21
19	Dialogue père-Charles.	Dialogue père-Charles.	21
20	Épilogue du narrateur.	Épilogue du narrateur.	21
21		Esquisse d'un dialogue.	22A
	<i>Chap. III</i>	<i>Chap. III</i>	
22	Bernard chez Olivier.	Bernard chez Olivier.	23-25
23	Olivier parle de Vincent.	Olivier parle d'Étienne.	26

校訂版作成者による論証

紙片 7 A の冒頭に記された第 1 の草案は、ベルナールがプロフィタンディューに宛てて手紙を書く事情を素描している。この草案は実際には採用されなかったものだが、それが占めるべき位置は小説〔決定稿〕の第 1 章にはっきりと指定されているのである。S1 は、母が 17 年前、「つかの間のあやまち」の時期に愛人から受けとった手紙を読みふけるベルナールを描く。そのなかの 1 通で自分が話題になっていることを確信して、彼は父に家出を告げる手紙を書く決心をするが、そのまえに考えをまとめ、仮の宿を確保するためオリヴィエに会いに行く必要を感じるのである。したがって、当初計画されていた場面は、まさにリュクサンブール公園でのベルナールとオリヴィエの出会い (S2) のあとに場を占めえたであろう。しかし実際には、ベルナールは第 3 章まで姿を消してしまう。語り of 戦術は完全に方向転換したのであり、読者は手紙を、ベルナールが書いている時点で知るのではなく、プロフィタンディューの視線のもとに読むことになる。息子の不意で不遜な別れに対して父が直後に示す反応を描くことが重要だからである。こういった心理分析の要請が叙述にかんするあきらかな草案を排除したのである。

サン・ジェルマン大通りでのプロフィタンディューとモリニエとの議論 (S3) は、ある非行少年事件だけを対象にしている。子供の教育について交わされる話題

は、作者の皮肉な声をはっきりと聞かせ、帰宅したプロフィタンディューが味わう挫折を予見させるものである。だが、この皮肉を正当化するためにも、また予審判事をまちうけるドラマを示唆するためにも、ベルナールが私生児である必要はまったくない。贖金つかいのグループやジョルジュ、ベルナールの家出について読者がのちになることになる情報で十分にこと足りるのだから。このように、S3は改作の必要がまったくないので、純粹に執筆時の修正がわずかに認められるだけなのである。

ベルナールが父の家を去る、そしてそれをプロフィタンディューに知らせるようアントワーヌに託さねばならないS4のばあいはそうではない。「初稿」(紙片4)はあまりにも遺漏が多く、そのため物語の論理は混乱しているのだ。じじつ、プロフィタンディュー家でのアントワーヌの奉公を順をおって述べたのち、テキストはベルナールの家出の動機と重大さに対してこの使用人がいさぐ疑念を喚起することに移っていくのに、ベルナールの方は彼に別れを告げる労さえとらないのである。だからそこからつぎのような疑問が生じるのだ。もともとベルナールは、書いて当然と思われた箇所(リュクサンブール公園での出会いのあと)で紙片7A・8Aの手紙とは内容を異にする手紙を書いていたのではないか、やはり同じ箇所で手紙をアントワーヌに託しながら彼に別れを告げていたのではないか、そしてこの手紙は新たな手紙に代えられるために削除されたのではないか、という疑問が。テキストがそういう状態であったと想定しないかぎり、S4の当初の執筆内容は考えられない。第1章でこのような挿話が欠落したために生じた間隙を埋めるために、紙片3の裏面に5行の加筆がおこなわれ、当該箇所に矢印で送られたのである。ところで、この加筆ではまだささやかすぎて、語りの論理を立て直すにはほどとおい。そこでは、ベルナールは「アントワーヌに愛情を感じないではいられなかった」、「彼に別れを告げずに家を出たくはなかった」、「おそらくは家族へのつらあてに、父や母、兄弟たちが知らないでいるこの家出を単なる使用人に打ち明けるのをよるこびとした」と記され、ついで、その弁解として「家族のだれもがそのときには不在だった」と付け足され、最後に、ベルナールの別れは「行くよ」という短いことばに要約されているのである。そして、手紙への言及は皆無であるにもかかわらず、アントワーヌはセカンスの末尾でプロフィタンディューの注意を手紙にむけさせるのだ。少なくとも、この加筆の内容もまた私生児という動機にはまったく触れていない点を確認するのは興味ぶかい。一節は、補完さえされていて、理由の不明な家出というコンテクストにおいて書かれたもののように思われる。というのは、さらに「彼らに別れを告げれば、ベルナールはなんらかの説明をしなければならなかつたろうし、それはさけたいと思っていたことだった」と書きつがれているからだ。このような語りの論理のねじれや、全体としてベルナールの動機が不十分である点をはじめて正されるのは、決定稿への移行段階になってのことである。つまり、完成した小説では、追加された3つの段落がベルナールの別れをゆたかにふくらませ、「事務机の上に」おかれた手紙をようやく喚起し、「父」という用語を排除し、「家族」は自分をひきとめるのではないかという懸念によってベルナールの危惧に微妙な陰影を与えることになるのである。他のどの箇所でも決定稿への移行が草稿のテキストを削減することでおこなわれているだけに、この加筆はとりわけ注目に値する。

本テキストのセカンスをすべて検討したり、ましてや先行テキストを再構成しようとするのは、この短い序文の意図するところではない。しかしながら、これまでの分析によって、少なくとも草稿のいくつかの部分が、ベルナルの生い立ちにかんするひらめきをジッドがえた時期にはすでに書かれていたこと、また現在知りうるかぎりでは、他の部分についても必ずしもこの発見ののちに執筆されたとは主張できないこと、それは十分に証明されたのである。たとえば、アントワヌ (S5) やブランシュ (S8)、カループ (S9) らによる中断、夕食の長い挿話 (S10-15)、そして父をかこむ家族の場面 (S16) さえもがベルナルが私生児であることにはあきらかに関与しておらず、またこの事実〔出生の秘密〕は各セカンスの進行中いっさい言及されていない。したがって、これらのセカンスはいずれも追加紙片 (7A, 8A, 22A) の執筆以前からまったく現状どおりに存在していたとしてもおかしくない。他方、プロフィタンディューがベルナルの家出について頭を悩ます S7 と S18 や、彼がマルグリットと対話する S17、シャルルと対話する S19 だけが、はじめから存在していたのならば若干の手直しを必要としたと思われる。前者のセカンス群の紙片には修正が僅少であることや、加筆・削除がかなり目立って後者のセカンス群に集中していることを考えあわせれば、それらはすべて最初から存在し、「初稿」を構成していたのであり、1922年10月7日のジッドによる発見に応じ、必要に迫られて修正を施されたものと見なしうるのである。

以上がキイポールの分析だが、今いちど確認しておけば、7A・8Aは基本的にはすでに書かれていた紙片群に、「突然のひらめき」を契機として挿入された加筆であるというのがその結論である。ところで、決定稿に究極的な価値の所在をもとめた伝統的実証主義にせよ、「アヴェン＝テキスト」に独自の地位を与えようとする近年の生成学にせよ、検証しうるたしかな事実（たとえそれが自説に不利なものであれ）を優先し、推測・推論はあたくさぎり留保すべきである点ではなんらかわりはない。キイポールが自説を展開するさいに、はたしてこの原則は忠実に守られているのだろうか。

引用文の最初の段落でキイポールは決定稿の第1章 (S1-2) に言及しながら、7A冒頭の草案が削除されたのは、ベルナルの手紙の配置が登場人物にかんする「心理分析の要請」によって変更を余儀なくさせられたためと断言している。草案が結局は廃棄されたことから、ある時点で「語りの戦術の方向転換」が生じたのはあきらかであり、その点についてはなんら異論はない。しかしながら、手紙が草案の指定する位置におかれなかったという事実そのものは、キイポールが示唆するようにただちに紙片群の執筆順序にかんする判断材料になるわけではない。なぜならば、ジッドは私生児のテーマの発見にもとづき、まず手紙とこれに先行する描写の草案を書いていたが、「心理分析

の要請」に応じて当初の計画とはちがう場面にこの手紙を移すことを思いつき、そのうち第1章をはじめとする他の部分の執筆にとりかかった、そう想定したとしても同様な「語りの戦術の方向転換」が不可能になるわけではけっしてないからである。なお、ここで「他の部分の執筆」とは、草稿が保存・発見されていない第1章をのぞけば、いうまでもなく現存草稿のそれを指すのであって、後述するように7A・8A以外の紙片、とりわけそのまえに位置する紙片2-6について先駆稿の存在を否定するものではむろんない。こうしてキイポールとはまったく逆の論理をたどったばあいでも同一のテキストに到達しうる以上、またあくまでも分析の初期段階では複数の蓋然性の優劣を先験的には決定できない以上、そのいずれか一方のみを指摘してこれに依拠することは説得的な論証の手続きとは認められまい。

草稿のS3相当部分(紙片2-4)にかんするキイポールの主張はこれにもまして非論理的といわざるをえない。なぜならば、彼自身も述べるように、当該セカンスの論述にはもともと「ベルナールが私生児である必要はまったくない」のであり、したがってそこに改作の跡がなく、すでに決定稿とほぼ同じ内容をそなえている点はむしろ当然の帰結と見るべきであるのに、逆に彼はこの事実を<7A・8Aはのちの加筆>という自説の根拠のひとつに組み入れようとしているからである。このセカンスがキイポールの有利にはたらくのは私生児のテーマを反映する修正・加筆が認められるばあいだけであって、そうでないかぎりには判断を留保しなければならない箇所なのである。

では第3段落についてはどうだろう。家出の情景を描いたS4(紙片4-5)を対象とするこの段落は、その長さからも容易に推察されるように、キイポールが論証のかなめにすえようとするものである。言説は段階的にたたみかけられ、一読したところでは説得的な印象さえあたえるかもしれない。しかし、その論理を注意ぶかく検討するならば、これが、草稿と決定稿とのあいだに認められる差異を逆手に利用することで、先の2段落と同様、あらかじめ特権的に選択された結論に導こうとしていることが判明するのである。たしかに、キイポールが「初稿」と呼ぶ部分(大型紙片群の初期状態)は「あまりにも遺漏が多く、そのため物語の論理は混乱している」といわねばならない。この事実から彼は、現存草稿や決定稿とはちがう位置におかれていた、内容を異にするもうひとつ別の手紙を想定し、新たな手紙によって生じた論理のねじれをたてなおすために紙片裏面へ5行の加筆推敲がなされたと断言するのである。しかし、ベルナールがすでにアントワーンには家出を告げ、父への手紙を託してい

たことが「初稿」に示唆されているとしても¹³⁾、いったいどのような根拠から、後者がいなく疑念や不安にもかかわらず前者が沈黙することがもうひとつの手紙の存在を必然的なものにし、紙片群の執筆順序決定に関与すると断定できるのか。第1段落のばあいと同じく、ジッドは最初から手紙を現状どおりに書いていたが、「語りの戦術の方向転換」によってその配置を変更した、ついでこの変更を念頭におきながら、しかし結果的には不備を残すかたちで大型紙片群を執筆した、と考えるもなんら論理的な矛盾は生じず、蓋然性においては同等、あるいはそれ以上といえるのではないか。したがって、加筆推敲だけが7A・8Aの執筆後だという主張が有効たりうるのもやはり、この加筆が作家の「突然のひらめき」を反映しているか否かにかかっているのである。にもかかわらず、キイポールは「この加筆の内容もまた私生児という動機にはまったく触れていない」、「理由の不明な家出というコンテクストにおいて書かれた」、「語りの論理のねじれや、全体としてベルナルの動機が不十分である点がはじめて正されるのは、決定稿への移行段階になってのことである」と正反対の指摘をつらねるのである。該当箇所にかんして草稿が決定稿に近似しているのならばともかく、実際には上述のように草稿の内容が最終段階になっても依然としてその不備を解消されていないという、むしろ反証となるべき事実によって自説を補強できると考えるキイポールの議論はあまりにも恣意的で、とうてい賛同をえられるものではありえない。

さほど長くはない最後の段落においてキイポールは、それまでのテキスト読解を根拠に、少なくともS1-4に対応する草稿（ただし、前述のようにS1-2の草稿は今日にいたるまで未発見）が1922年10月7日以前に書かれていたことは証明済みであると断言するばかりか、現存草稿の大半をなすS5からS19までのすべてのセカンス（紙片5-21）を2つのグループに分類・列挙しながら、これらについても同様であった可能性がきわめて高いと述べて論証をおえるのである。S4までにかんして彼の主張がいかに独断的な操作にもとづくものであるかはすでに確認したとおりだが、後続部分の分析については事態はさらに深刻であるといわねばならない。なぜならばそこでは、彼の主張を明確に否定するいくつかの重要な指標がおおまかで性急な議論によってすべて切り捨てられているからである。まず、第1セカンス群（S5とS8-16）は「ベルナルが私生児であることにはあきらかに関与しておらず、またこの事実は各セカンスの進行中いっさい言及されていない」という指摘そのものは、先に挙げたいくつかの例と同じように、草稿の執筆順序を判断する材料にはなりえ

ない。それどころか、これらのセカンスのすべてが私生児のテーマと無関係であるとは必ずしもいいきれない。たとえば、プロフィタンディューが子供たちにベルナールの家出を告げる S 16 (紙片 19) にはつぎのような一節 (若干の字句の相違をべつにすれば決定稿どおり) が最初から存在しており、あくまでも真相は隠さねばならぬ父親としての語りのニュアンスによって、すでにこのテーマは濃厚に暗示されているからである ([] は削除, < > は加筆)。

「今日は、おまえたちにこれまで隠していたことを打ち明ければならない。隠していたのは、おまえたちにベルナールを本当の兄弟として愛してもらったためだったのだよ。お母さんにしても、わたしにしても、本当の子供のように可愛がっていたのだからね。しかし、じつはあの子はわたしたちの子ではなかったのだ……そして、あの子のおじさん、臨終にあの子をわたしたちに頼んでいた [亡くなった] <本当の> お母さんの兄弟が……今日の夕方、あの子を引き取りにきたのだ」 [119, 121]

他方、第 2 セカンス群 (S 7 と S 17-19) についてキイポールは、「修正が僅少である」第 1 群に比べ、そこには加筆訂正が「かなり目立って集中」していることを理由に、加筆部分だけが 7 A・8 A の執筆後に書かれたと結論しているが、この見解は二重の意味で同意することができない。まず、第 2 群に加筆訂正が集中するという指摘そのものがはなはだしい事実誤認なのである。なるほどこれらのセカンスに対応する草稿のうち紙片 9 や 20, 21 には裏面への加筆が 5 か所、欄外加筆が 1 か所存在しているが、第 1 群にも同様に裏面 (紙片 12, 14, 16, 18) に 5 つ、欄外 (紙片 10, 15) に 4 つの加筆が施されており、両群のあいだにキイポールが断言するほどの顕著な量的偏差は認められないのである。また、彼が加筆の内容自体についてはまったく検討していない点も納得できない。彼の主張が有効であるためにはここでもやはり、単に加筆の存在だけでなく、ベルナールが私生児であることを示す要素が「初稿」にはなく、加筆部分にのみ存在していることが条件となるからである。それでは実際にはどうなのか。たしかに、第 2 群の加筆のうち 3 か所には私生児のテーマの反映がなんらかのかたちで確認できる。しかしながら、それらの前後を含めて草稿の数か所で、母マルグリットの不義をはっきりと示す表現が「初稿」の段階からすでに存在しているのである。たとえば、思案にくれるプロフィタンディューを描いた S 7 (紙片 9) の以下のような一節である (原文には文体上の細かな修正が含まれるが、いずれも消された語句の直後や行間への書き込みで、「初稿」に属するもの。判読の便を考えて、ここではテキストの最終状態

のみを示す)。

兄弟がいなくなったことを子供たちにどう説明すべきだろう？ だが子供たちに真実を話し、母親のつかの間のあやまちという秘密を知らせることは彼にはできない。ああ！ すべてがかくもみごとに許され、忘れられ、修復されていたのに。末の息子の誕生がふたりの和解を確固たるものにしていたのに。[77]¹⁴⁾

また S 17 (紙片 20) で、子供たちへの説明をおえたのちの夫婦の対話にも私生児のテーマを明確に読みとれる記述がはじめから存在している (引用の方法は上述のとおり)。

「これが罪の償いというものだ」と彼はいった。〔…〕彼は、自分がこれまでいつもつかの間のあやまちと考えようとしていたことに対して、妻の後悔のしかたがきわめて不十分だったことをよく知っていた。〔…〕彼は妻のほうに身をかがめる。そして悲しそうにいう。「ねえ、おまえ。やはり罪からはけって善いことは生まれないのだよ。〔ここに紙片 19 裏面への加筆が挿入〕」〔…〕

「ほら、ごらんなさい……ごらんなさい……ああ！ なぜあなたはわたしを許したのです？ ああ！ ああ！ ああ！ わたしは帰るんじゃないわ」[123, 125]

付言すれば、引用文の最後にある「ああ！ わたしは帰るんじゃないわ」という、苦い後悔のこもったマルグリットのことばは 8 A 末尾の草案 (第 150 頁参照) にも認められるものである。キイポールの主張するように草案が「初稿」のあとに作られた修正案だとするならば、なぜジッドはこのように母の同じ台詞を、しかもひとつの台詞だけをくりかえし書きとめておく必要があったのだろうか。また、やはり当該草案に記載された「なんという恩知らずだ」という父の反応についても同様の疑問を禁じえない。なぜならば、「この手紙は不当だ、とんでもない不当な内容だ。まず腹をたててしかるべき筋合いのものだ。この悲しい気持ちを憤激の情と思いたいほどだ」[77] という、草案の表現よりもさらに説明的な台詞が「初稿」の段階ですでにもちいられ、これが決定稿でも字句の変更なく踏襲されているからである。にもかかわらず、キイポールはそういった矛盾を指摘しないばかりか、じつは、もっぱら 7 A 冒頭の草案を論ずるだけで、8 A 末尾の草案の具体的な内容については一言も発せず、紙片群の執筆順序にかんする議論からこれを完全に除外しているのである¹⁵⁾。

くだすべき結論はすでに見えている。しかしここでひるがえって補足するな

らば、分析の手段として描かれた内容やシーンに応じてテキストをセカンスに分割することはともかく、草稿そのものの物理的な形態を無視してこれをおこなうことにはおおいに疑問を呈せざるをえない。たとえば、キイポールが異なるセカンス群に分類する S7 と S8 は実際には紙片 9 のなかに共存しているのである。そしてとりわけ、草稿の大部分にあたる大型紙が紙片 6 をのぞいていずれも全面を使用され、しかもそのほぼ半数ではひとつの文が 2 葉にまたがって記されているのだから、少なくとも紙片 2-6 や紙片 9-21 にはそれぞれ物理的なレベルで連続性が認められるという指摘を欠かすべきではない。というのは、この事実を前段での考察結果とつきあわせることで、紙片 9-21 はすべて 7A・8A のあとに書かれたという断定がまず可能になるからである。では、紙片 2-6 のばあいはどうなのか。すでに見たようにテキスト細部の指標はどちらかといえば、これらもまた 7A・8A 以後の執筆であることを示すものではあったが、あくまでも決定的な確証と呼べるものには欠けていた。しかし、それにかんしてはある物理的特徴のもつ重要性が見すごされていたのである。つまり、紙片 6 に記載されたテキストがまさにこれからベルナルの手紙を読もうとするプロフィタンディューの描写で終わり、内容的には 7A・8A になんら齟齬なく接続しているのに、紙片そのものは後半が未使用で白紙状態のまま残されている点である¹⁶⁾。7A・8A が事後の加筆として挿入されたという仮定に立つかぎり、紙片 6 は後続テキストをもち、他と同様に全面を使用されていたはずで、後半部が未使用という現状の合理的な説明はなりたちえない。したがって、先行紙片との連続性からも必然的に 6 をはじめとする 5 葉のすべてがやはり 7A・8A のあとに書かれたものと同定されるのである。また、残りの部分、すなわち完全に独立した内容の素描である 22A と、私生児のテーマにはまったく関与していない後続紙片 23-26 についても、用紙の種類や使用法から判断して、前者は 7A・8A と、後者は 2-6 や 9-21 とそれぞれ同じ時期に属することはまず疑えまい。少なくとも、2 種類の用紙が交互に使用されたとはとうてい考えられないのである。こういった諸点が確認された今となつては、キイポール自身が指摘し、かつそれだけでは薄弱な根拠としてしりぞけた、ギイやフェルディナンという 7A・8A および 22A における登場人物の名前の特殊性も、もはやわれわれの結論の強力な傍証とならざるをえまい。

草稿の内容や物理的側面にかんする以上の批判的検討によって、キイポールの立論が「詳細な草稿分析」にはほどとおく、恣意的・選別的な憶断にもとづ

くものであることがあきらかになった。そして、少なくとも紙片群の執筆順序の点では、ほとんど直感だけにたより、実証的な根拠を欠くサンチャゴの推測、〈最初に書かれたのは7A・8A〉という推測のほうが結果的には正しかったことが証明されたわけである。残る問題は、ともに少なくとも1922年10月7日以後と判明した執筆時期を両端からさらにしぼり込むこと、そして可能ならばその作業をつうじて、草稿が作品の生成過程において独自にもつ意味をさぐることであろう。まず7A・8Aについては、「突然のひらめき」からさほど間をおかずに書かれたのが確実なのである。というのは、マリア・ヴァン・リセルベルグの筆になる『プット・ダムの手記』が、翌年1月30日付でつぎのような証言を残しているからである。

ジッドはわたしたちに、(ベルナル少年の手紙以外は)自分がまったく満足していない第1章を、ついで、文の調子(ベルナルのオリヴィエ宅到着)がかなり気に入っている他のいくつかの章を読んで聞かせた。そこでは、まずロベール・ド・パサヴァン、レディ・グリフィス、そして最後にエドゥワールの日記が登場した。¹⁷⁾

この時点で「ベルナル少年の手紙」とはむろん7A・8Aのそれにほかならない。さらに、手紙がまだ当初計画された位置におかれていることや、「他のいくつかの章」の記述が現存草稿の内容だけを欠くことから、ここで述べられているのが大型紙片群の執筆以前の状況であるのは疑えず、7A・8Aの配置変更に応じて大型紙片群が書かれたという先の結論に正確に対応しているのである(これによって、後者の執筆時期は1923年2月以降であることも判明する)。ちなみに、キイポールの誤りが主としてどこに起因するののかもすでにあきらかだろう。つまり、ジッドの書簡(第150頁参照)はたしかに動機の発見のみを問題にし、主人公の家出そのものについては規定の事実として語っていたが、キイポールは「私生児の主題によって家出を動機づけることをせずにジッドが最初の数章を実際に書いていた」という可能性を強調しながらも、先駆稿をはじめから考察の対象として放棄したため、現存草稿のなかに当該証言のあくまで全的な反映をもとめざるをえなかった点に起因するのである¹⁸⁾。

他方、大形紙片群の下限にかんしては、ジッドが1924年になってもこの草稿にかかわっていたとはとうてい考えられない。それ以後は『日記』や『贖金つかいの日記』の記述が決定稿の第2部および第3部の進展状況に集中していくだけでなく、前年12月27日付の『贖金つかいの日記』にすでにつぎのよう

な第1部全体にかんする包括的な記述が認められるからである。

ジャック・リヴィエールがたった今帰ったところだ。彼はここに3日間逗留していった。わたしは彼のために『贖金つかい』の最初の17章を読んで聞かせた（第1章と第2章はすっかり書き直さなければならない）。¹⁹⁾

この証言が予告する作品冒頭部の推敲をへて現存草稿は決定稿へと移行していくわけだが、キイポールもいうように²⁰⁾、その過程で全面的に削除されてしまうだけにとりわけ注目に値するのが、2人の予期せぬ来客——いくつかの特徴がモリニエを思わせる、Yとのみ名づけられた男性と、マルグリットの友人で、彼女がたまたま家につれてきた、ブローニャあるいはイルダ、さらにまたフレダとも呼ばれる若い女性——をまじえたプロフィタンディュー家の夕食の場面（S10-15）である。なかでも、自由奔放な言動で会食者のあいだにさまざまな反応（プロフィタンディューの憤慨からマルグリットの無言の賛同まで）を呼び起こすブローニャは、この長い挿話を支配する中心的存在といってさしつかえあるまい。その彼女がどのように描かれているかを検討することで、大形紙片群の時期推定をさらに押しすすめることができるのである。

キイポールは、ブローニャを「自由で勝ち誇ってはいるが、〔同性愛者ジッドにとっては〕不毛な存在であることを宿命づけられ、結局、文学的には廃棄物の地位に追いやられるフェミニテの象徴」ととらえることで、挿話に「異性愛の組織的な価値低下」の意図を読み、それが削除されたのは「ジッドのプシュケが男性のなかにしか蕩児を胚胎しえなかった」ためであるという解釈を提出していた²¹⁾。これに対して、『ジッド友の会会報』最近号（1990年10月）に掲載された書評でピエール・マッソンは、ブローニャが姿を消すのは、彼女を登場させる意義が不十分なためではなく、この人物が当時のジッドにとって新たな重要問題（のちの『女の学校』3部作の題材として取っておくほど重要な問題）を体言しているという点で、むしろ「意義の過剰」によるのだ、つまり「ジッドは『贖金つかい』において自由な母性というテーマを展開しようと考えていたが、彼がそれを断念するのは、拡散的な外観のもとで小説をつかさどっている統一的な運動をそこなわないためにすぎない」²²⁾と説くのである。挿話に女性の否定的表現を見るキイポールとは逆に、「自由な母性」の重要性を指摘するマッソンの主張が抗しがたい説得力をもつのは、彼がこの登場人物のなかに忠実に投影されたジッドのある伝記的な事実を見逃していないからで

ある。

ブローニャのなかに、ジッドが1923年4月に一子をもうけたエリザベート・ヴァン・リセルベルグ〔マリアの長女〕のほとんどあからさまな肖像を見てとることができよう。態度や身なりの独創的で奔放な点、モロッコ旅行からジッドが持ちかえった贈り物を想起させる首飾りや「授乳の経験がありそうな豊かな胸」が、かなりの確度で、プチット・ダムの記録する、ジッドのなごんだ眼差しのもとで授乳する女性のことだと特定させる。自由や、閉ざされた家庭の嫌悪、養子制度がもたらす幸福などにかんするブローニャの話題は、ジッドが場景の脇役的な観察者 Y に巧みに抱かせる直感、すなわち「彼女はあちらで私生児を産んだにちがいない」という直観をいやがううえにも確実なものにするのだ。あちらとはブローニャが滞在していたポリネシアのことだが、ジッドの日記のつぎの一節を信ずるならば、実際にははるかに近い場所、彼にとってはもっと秘められた暗示的意味をもつ場所に対応しているのである——「イエールの浜辺で楽しい数日をすごす。エリザベート・ヴァン・リセルベルグが思いがけず私に会いにやってきたのだ。彼女といっしょに松林を散歩しているとき、かつての塩田のそばに不思議な小邑、ポリネシア風とでもいえそうなル・ペスキエを発見した」。²³⁾

『プチット・ダムの手記』の読者にとっては、マッソンの挙げている養子の話題や、ジッドがモロッコから持ちかえった首飾りなどの共通点だけにとどまらず、名前の類似（ブローニャがフレダと呼ばれるときには、オランダ/フラマン的な姓ヴァン・デン・ブローデンをとまなう）をはじめ、ブローニャのなかにエリザベートの特徴が細部にいたるまでに投影されているのは容易に確認できることなので贅言は不要と思われる。ただつぎの点だけは、ジッドの創作意識を理解するうえで興味ぶかいので補足的な説明をしておこう。マッソンの引用する『日記』は1921年9月初の記述なのだが²⁴⁾、そこに描かれた南仏の保養地イエールがきわめて重要な意味をもつことになるのは、翌年7月にエリザベートがジッドの子を宿したのが、彼女の証言によればやはり同じ浜辺だったからだ²⁵⁾。したがって、「ポリネシア」という一見唐突な〈土地の名〉が草稿にあらわれるのも、これが作家のファンタスムにおいては秘匿すべき現実、イエールやル・ペスキエとふかく結びついているからであり、個人的禁忌の隠蔽と示唆という彼特有の両義的な要請にもとづいていることは疑えないのである。さて、そののち娘カトリーヌが誕生するのは正確には1923年4月18日、メイリッシュ夫人らとモロッコに旅行中だったジッドが知らせを受けて帰国するのは同月下旬のことである。組織的に投影されたこれら一連の伝記的事実と

の照合によって、少なくともブローニャが関与する S 10-15 (紙片 10-19) の執筆時期にかんしては、モロッコからの帰国後、すなわち 1923 年 5 月以降と特定できるのである。また、同年 2 月以降のものであることがすでに判明していた他の大型紙片についても、先述の物理的な連続性を考慮するならば、これとあい前後して書かれたと見てまずまちがいあるまい²⁶⁾。

本稿を終えるにあたり、ロンドン草稿にかんするわれわれの結論を再度確認しておこう。ジッドは、1922 年 10 月に主人公ベルナルを私生児として描くことを思いつき、まもなく 7A・8A に、家出の動機を明記した手紙を書き、同時に、その配置を草案としてメモしておいた。ついで、草案の計画どおりに手紙の前後の場面を書くが、それには満足できず、手紙の位置を変えることにした。この変更にしたがい、1923 年 5 月頃から年末までのある時期に大型紙片群を執筆したが (ただし不備を残すかたちで)、そのさい、たまたま自分の身に起こっていた秘密の体験を小説の素材として取り入れようとした。しかしながら、問題の射程が予想外に大きく、『贋金つかい』という作品のなかには収まりきれないために、1924 年以後の決定稿への移行段階で、この部分だけが全面的に削られることになったのである。

註

- 1) André GIDE, *Un fragment des «Faux-Monnayeurs»*, édition critique du manuscrit de Londres, établie et présentée par N. David KEYPOUR, Lyon: Centre d'Études Gidiennes, 1990, 164 pp. 同版からの訳出・引用にあたっては、そのページ数のみを本文中 [] 内に示す。また、これと区別するために、筆者の補注や中略の記号としては [] をもちいる。
- 2) Sylviano SANTIAGO, «Fragmento de *Les Faux-Monnayeurs* (Édition de um manuscrito inédito)», *Revista de Livro*, Rio de Janeiro, n° 29-30, pp. 50-94.
- 3) Catharine SAVAGE BROSMAN, *An Annotated bibliography of criticism on André Gide, 1973-1988*, New York & London: Garland Publishing Inc., 1990, p. 179.
- 4) N. David KEYPOUR, *André Gide. Écriture et réversibilité dans «Les Faux-Monnayeurs»*, Montréal: Les Presses de l'Université de Montréal / Paris: Didier Érudition, 1980.
- 5) 1972 年以前の主な研究についてはライムント・タイスによるジッド研究史 (Raimund THEIS, *Gide*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1974), 110-114 頁を、1973-88 年については同期間に発表された著作・論文をほぼ網羅

- したサヴェッジ・ブロスマン前掲書誌, 173-193頁を参照されたい(いずれも簡略な内容紹介と評価を付す)。また、『ジッド友の会会報』の最近号が『贖金つかい』特集を組んだが, そこでも比較的詳しい書誌が参照できる(voir *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 88, octobre, pp. 601-623)。ジッド研究における校訂版作成の現状にかんしては, 拙論「アンドレ・ジッドの『放蕩息子の帰宅』——批評校訂版作成のための覚え書——」, 北海道大学『言語文化部紀要』, 第16号, 1989年8月, 1-2頁および註5(17頁)を参照されたい。
- 6) 草稿がブリティッシュ・ライブラリーに収まるまでの経緯については, キイポール前掲校訂版の序文, 12-13頁を参照されたい。ただ, サンチャゴ校訂版では1966年時点で草稿はブラジルにあったように記されているのに対し, 現蔵図書館のノートには1964年5月11日のサザビーズの競売で落札・入手されたい旨が記されているという矛盾点が未解決のままである。キイポールがこの著名な競売会社の記録に直接あたっていないことが惜まれる。
- 7) 『贖金つかい』の自筆完成稿は現在パリの蒐集家エミール・サバチエ氏の所有になるが, 同氏は1969-70年のジッド展(後註18参照)に出品協力した以外は, これまで研究者からの閲覧許可の願いを受け入れていない模様。
- 8) Voir André GIDE, *Journal des Faux-Monnayeurs*, Paris: Gallimard, [éd. 1975], pp. 53 et 55. なお、『贖金つかいの日記』の日付についてキイポールは, 「第1の手帳」は1921年12月7日で終わるのに, 「第2の手帳」が同年の8月から始まり, 前者と時間的に重複していることを理由にして, これらの日付をそのまま信じるのにはきわめて慎重であるべきだと付言している(前掲校訂版の序文17頁参照)。しかしながら, 記述内容との関連から判断するかぎり, その信憑性に疑義をはさむことはむづかしい。じじつ, これまで研究者の議論はむしろ手帳の重複をどう解するかという点に絞られ, しかも問題には以下のようにすでに決着がついているように思われる。つまり, まずダニエル・ムートトが, 手帳の交替に作家の精神的変化のあらわれを見るべきであると主張していた(voir Daniel MOUTOTE, *Le Journal de Gide et les problèmes du Moi (1889-1925)*, Paris: PUF, 1968, pp. 526-527)。実証的な根拠に欠け, いきおい恣意的といわざるをえないこの解釈に対して, ルネ・ギーズは, ジッドが1921年7月末から10月初までコルバックなどの遠隔地に滞在し, キュヴェルヴィルには不在だったという, ただ単に物理的な制約によるものだと説いたのである(voir René GUISE, *Pour une étude du «Journal des Faux-Monnayeurs» d'André Gide*, Nancy: Université de Nancy II, s.d. [1972], p. 44)。ギーズの主張は, ジッドの習慣を考慮に入れれば, いっそう説得的である。というのは, 通常の『日記』のばあい, 彼は旅先には普段の手帳とは別の小型サイズを持参し, あとから必要に応じて(とくに出版にさいして)本来の手帳に挿入するという方法をしばしばとっていたからである(筆者自身, ジャック・ドゥーセ文庫で『日記』の自筆原稿を閲覧中に頻繁に遭遇した事実)。ちなみに, 『贖金つかいの日記』の自筆原稿(大小2冊。未刊の記述も少なくない)は現在, テキサス・オースチン大学図書館の所蔵(カールトン・レイク寄贈蔵書)。
- 9) André GIDE-Roger MARTIN DU GARD, *Correspondance*, 2 vol., Paris: Galli-

mard, 1968, t. I, p. 178.

- 10) *Ibid.*, p. 193.
- 11) 本段落の要約は、前掲校訂版の序文 16-18 頁による。
- 12) 以下のリストおよび抄訳は、同上序文 19-23 頁。抄訳にあたって生成学用語については、吉田城「小説の誕生——「コンプレー」の創作過程に関する研究——」(『京都大学文学部研究紀要』, 第 29 号, 1990 年 3 月, 15-25 頁) を参考にしたが、キイポールの術語法は必ずしも厳密ではないので、内容にそくした訳語を適宜もちいた。なお、草稿のトランスクリプションと並行して提示された「決定稿」について、キイポールはそのレフェランスを明記していないが、句読法などの微細な差異から判断して、ジッドの没後に企画・編纂され、作家自身はまったく関与していないプレイアド版『作品集』(*Romans, récits et soties, œuvres lyriques*, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1958, pp. 933-959) であるのは疑えない。しかしながら、草稿の内容分析においては、当然これにもっとも近い時期のテキストを示し、たとえ小さな異文であっても、両者のあいだに介入しうる異質な要素は可能なかぎり排除しなければなるまい。したがって、先述のように参照が困難な自筆完成稿はともかく、少なくともプレオリジナル(『新フランス評論』誌の 1925 年 5 月 1 日号から 5 回にわたり、第 2 部第 7 章までが分載)か、初版(新フランス評論出版社, 1925 年付, 翌年 2 月発売)が使用されるべきであったと思われる。付言すれば、ジッド自身の校閲になる最終版は『全集』(*Œuvres complètes d'André Gide*, Paris: NRF, t. XII, 1937) のそれであって、存命中に出版された最後の版である、2 冊組挿絵入選集『物語, 小説, 茶番劇』(*Récits, romans, soties*, Paris: Gallimard, 1948, t. II) 収載のテキストにかんしては、校閲にはまったくかかわっていないことが判明している(voir Claude MARTIN [non signé], «Pour une édition critique» [du *Prométhée mal enchaîné*], *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 49, janvier 1981, p. 72)。
- 13) Voir KEYPOUR, *édition précitée*, p. 65.
- 14) 引用文冒頭の「兄弟がいなくなったことを子供たちにどう説明すべきだろう?」という表現は、S 16 (紙片 19) で「彼は子供たちにベルナールがいなくなったことを説明しなくてはならない」[119] というかたちで繰り返されている。決定稿では後者がほぼそのままのかたちで S 10 [82] に移動し、前者は内容重複のため捨てられるのだが、このように草稿内部で先行記述が削除されていない点は、テキストの論理が依然として矛盾を内包するものであることのひとつの証左といえよう。同様に、S 19 (紙片 21, [127]) に描かれた、父のベルナールへの思いは、加筆部分を含め、決定稿では S 7 [76] に移されることになる。
- 15) 草稿の執筆順序にかんする議論とは無関係のコンテキストで「放蕩息子」のテーマに関連した言及が 1 か所あるだけである(前掲校訂版の序文 34 頁参照)。
- 16) 紙片 6 の最後はつぎのとおり: «- Antoine! Antoine!... Et puis, va fermer les robinets de la baignoire. Il était bien question d'un bain! [Voici ce que M. lisait :] <Il s'approcha de la fenêtre> et lut:» [71].
- 17) Maria VAN RYSELBERGHE, *Les Cahiers de la Petite Dame*, coll. «Cahiers

André Gide», 4 vol., Paris: Gallimard, t. I [1973], p. 168. 挿入句の位置がやや非論理的なのは、フランス語原文のそれを尊重したため。原文は以下のとおり：
 « [Gide] nous lit le premier chapitre, dont il n'est pas content du tout (sauf de la lettre laissée par le petit Bernard), puis d'autres dont il aime assez le ton (l'arrivée de Bernard chez Olivier), où l'on voit d'abord Robert de Passavant, Lady Griffith, puis enfin le journal d'Édouard».

- 18) じじつ、ジッドの草稿分析にいくらかたずさわった筆者自身の経験からもいっても、大型紙片群はこの作家がはじめて筆をとって書きつけた内容としてはむしろ逆に整いすぎた印象を与えるし、また、生誕百年を記念して1969-70年にパリ国立図書館で開催されたジッド展には、作品のどの箇所に対応するものか詳細は不明ながら、あきらかに前段階にあたる「ノートとブルーヨン」の一群が現存草稿（同展のカタログはその性格を「プルミエ・エタ」と記述）とならんで出品されたが、校訂版序文の論述から判断するかぎり、キイポールがこの資料体の存在を承知しているとは思われないのである（voir le catalogue de l'exposition *André Gide*, Paris: Bibliothèque Nationale, 1970, p. 160, item n^{os} 537-538）。付言するならば、7A・8Aの草案とは異なり、22Aのそれが削除されないまま残っている点も現存草稿の過渡的性格のあらわれと見るべきであろう。

ところで、記載された文字を対象とする「パレオグラフィ」とともに、生成学において注目されている「コーディコロジー」は、本草稿のように紙片群の執筆順序が未確定のばあいには、とりわけ重要な研究項目といわねばならない。しかしながら、キイポールの校訂版にはこの面での配慮がほとんど認められないのである。同版にもとづき『贋金つかい』にかんして今後おこなわれるであろう研究のためにも、また他作品の生成研究のためにも、ここでその不備を指摘しておくことは無駄なことではあるまい。まず、紙片の判型や紙質、切り口の形状（シングルリーフかダブルリーフか。ジッドは本来ダブルリーフだったものを2つに切り分けて使用することもある）、透かし模様（ジッドが愛用した主な漉入紙としてはイタリアのポレーリ社製とファブリアーノ社製があり、両者とも何種類かの用紙が存在）にかんする記述が、前述のように（第149頁参照）、皆無か、あってもきわめて粗略で、とくに紙片1や7A・8A、22Aについては判型さえ示されていない。また、筆記具の種類や色の記述もない（ジッドは同一草稿のなかでペンと鉛筆を両用することもある）。さらに、頁付の方法や時期についての考察も不十分である（まず、頁付がジッド自身の手になるものか否かの記述がない。また、エイ夫妻への献辞のための紙片が1と打たれ、作品のテキストを記載した後続紙片群の番号がこれに連続していることから、この頁付が草稿執筆当時のものではなく、1949年、あるいはそれ以後のものであることを当然指摘すべき。ジッドの自筆原稿がしばしば後年に、そしてときには所蔵図書館や蒐集家などの別人によって、頁付をほどこされたことは実証研究上の常識ともいえる）。

- 19) *Journal des Faux-Monnayeurs*, op. cit., p. 69. なお、決定稿では第1部は18章からなっているが、この章立ての採用や、2部構成が3部構成に変更されるのは作品脱稿直前の1925年5月である（voir *ibid.*, pp. 85-86）。

- 20) KEYPOUR, *édition précitée*, p. 23.
- 21) *Ibid.*, pp. 25 et 35–36.
- 22) Pierre MASSON, [compte rendu de l'édition KEYPOUR], *Bulletin des Amis d'André Gide*, numéro précité, p. 628.
- 23) *Ibid.*, pp. 627–628.
- 24) André GIDE, *Journal 1889–1939*, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1948, p. 698.
- 25) Voir Maria VAN RYSELBERGHE, *Les Cahiers de la Petite Dame*, op. cit., t. I, p. 151.
- 26) ちなみに、ブローニャの挿話の主題論的な分析に重点をおくマッソンの書評は、他に特別な根拠を示さず、草稿全体がカトリーヌ誕生の数か月後に書かれたという推測を一言はさむだけで、紙片群の執筆順序や細かな時期確定についてはまったく言及していない。